

## P-061

### 歯科衛生士による周術期口腔ケアのかかわり

前橋赤十字病院 NST

○木村千重貴<sup>1</sup>、高坂陽子<sup>1</sup>、長岡恵美子<sup>1</sup>、田中淳子<sup>1</sup>、山口昌子<sup>1</sup>、伊東七奈子<sup>1</sup>、内山壽夫<sup>1</sup>、小林克巳<sup>1</sup>、加藤清司<sup>1</sup>

【目的】当院では2006年から消化器外科の周術期症例に対し、歯科衛生士による口腔ケアを導入した。口腔ケアは、手術決定時(1期)、手術前日(2期)、経口摂取開始前(3期)、退院前(4期)の4回に実施し、口腔状態の評価と衛生指導を行っている。2012年度の診療報酬改訂で周術期の口腔機能管理料が新設され、さらに重要性が高まった。そのため、2011年に施行した周術期口腔ケアの効果を検討したので報告する。

【対象と方法】2011年4月～2012年3月までの緊急手術を除く、全身麻酔下で手術を施行した396例中、1期から4期で口腔状態を評価した136例(男性67例、女性69例、平均64.8歳)を対象とした。口腔状態の評価は、「乾燥」「口臭」「舌苔」「清掃状態」「痰」の5項目で、「なし」が0点、「軽度」が1点、「重度」が2点に点数化し、合計10点とした。汚染状態で、0～2点(1群)、3～5点(2群)、6～8点(3群)9～10点(4群)の4群に分類した。また、Plaque Control Record (PCR)による評価も行った。口腔状態の評価とPCRを1期と4期で比較検討した。

【結果】症例の内訳は、食道がんが5例、胃がんが38例、大腸がんが49例、肝臓がんが5例、膵臓がんが5例、胆管がんが13例、胆石症が22例であった。口腔状態は、1期では1群が37例、2群が87例、3群が11例、4群は0例であった。4期では各々56例、67例、4例、0例であった。PCRは、47.7%から42.6%へと低下した。

【まとめ】口腔状態は、1群が1期から4期で増加したのに対し、2群と3群が減少した。PCRは、47.7%から42.6%へと低下した。歯科衛生士による口腔ケアにより、1期から4期で口腔状態が改善する傾向にあった。

## P-063

### 石巻赤十字病院におけるブレアボイド報告の現状

石巻赤十字病院 薬剤部

○早坂昭一<sup>1</sup>、野地郁彦<sup>1</sup>、真藤沙織<sup>1</sup>、武田哲志<sup>1</sup>、鈴木雄太<sup>1</sup>、追木正人<sup>1</sup>、鈴木香苗<sup>1</sup>、阿部浩幸<sup>1</sup>、古田昭彦<sup>1</sup>

【目的】ブレアボイドとは、「薬剤師が薬物療法に直接関与し、薬学的患者ケアを実践して患者の不利益(副作用、相互作用、治療効果不十分等)を未然回避あるいは重篤化回避した事例」のことである。当薬剤部では各病棟に薬剤師1名を配置しており、事例が発生した場合に報告書を提出している。今回、我々は当院におけるブレアボイドを報告すると共に、今後の展開について検討した。

【方法】対象は、平成22年4月1日から平成24年3月31日までに提出があったブレアボイド報告書を対象とした。内容を1)診療科別2)薬剤別に薬学的患者ケアをカウントし、薬剤師の薬物療法への関与を評価した。

【結果】ブレアボイド報告は、平成22年度及び平成23年度を合わせて103件あった。診療科別における報告は内科で22件(21.4%)、外科15件(14.6%)、循環器内科14件(13.6%)、消化器内科11件(10.7%)の順で多く関与していた。また、薬剤別の薬学的患者ケアは、抗生物質が32件(31.1%)と最も多く、TDMによる過量投与や副作用発現の回避が報告されていた。次に、抗がん剤の17件(16.5%)で、事例として体重減少による過量投与の回避やプロトコル監査による副作用回避等が報告されていた。

【考察】今回、ブレアボイド報告書を調査したことで薬剤師の薬物療法への介入状況を把握することができた。診療科では、内科系に留まらず外科でも報告数が多いことから全ての診療科に関わっていく必要がある。薬剤では、特に抗生物質や抗がん剤が多かったことから、TDMやプロトコル監査等には積極的に関わらなければならない。今後は、薬剤部としてより多くの薬物療法に積極的に介入し、報告数を増やしていきたい。

## P-062

### 急性期病院における周術期口腔ケアの取り組み

大分赤十字病院 歯科口腔外科<sup>1</sup>、大分赤十字病院 外科<sup>2</sup>

○木村ひとみ<sup>1</sup>、高藤千鶴<sup>1</sup>、諫山美鈴<sup>1</sup>、田中紳一郎<sup>1</sup>、野口紗耶加<sup>1</sup>、高尾真暢<sup>1</sup>、平井英治<sup>1</sup>、山本晃三<sup>1</sup>、木下忠彦<sup>2</sup>、福澤謙吾<sup>2</sup>、本廣昭<sup>2</sup>、若杉健三<sup>2</sup>

【緒言】がん治療における口腔ケアの重要性が以前より言われており、NCIのホームページでもその重要性が示され、平成24年4月からがん患者の口腔ケアが保険適応となり、今後多くの施設で、実施されることと思われる。

当院歯科口腔外科では平成21年より外科の周術期、がん化学療法・放射線療法の患者に対し歯科衛生士が専門的口腔ケアを行っている。今回、周術期における当院での口腔ケアについて報告する。

【方法】平成22年7月から12月までの間に、全身麻酔下にて手術を行う患者で協力の得られる患者28名を対象とした。周術期口腔ケアの重要性について説明し、口腔内の評価後に、スケーリングおよびPMTCを実施し術後も患者がケアの自立ができるように口腔清掃指導も行った。また、化学・放射線療法の患者においては治療開始前より外科手術前と同様に専門的口腔ケアを開始し、治療中においても口腔内評価を行った。治療終了後に患者のアンケート調査を行った。

【結果】アンケート項目は1.手術前後での口腔内変化の有無2.手術前に専門的口腔ケアを受けた感想3.専門的口腔ケア実施後の口腔に対する関心度の変化4.手術前と比較したセルフケア回数の変化とした。調査の結果半数以上の患者において口腔内の変化、口腔への関心度が高まったと回答があった。

【考察】がん治療における口腔ケアは周術期の合併症を減少させるとされ、化学療法時に口腔内の有害事象、感染症を減少させると言われている。今回の調査では明らかにならなかったが、患者の口腔ケアに対する意識向上が図れたと考えられる。

今後院内での啓蒙活動も積極的に行い、がん患者の合併症の減少に貢献することを目指したい。

## P-064

### がん化学療法における疑義照会の解析

名古屋第一赤十字病院 薬剤部<sup>1</sup>、化学療法内科<sup>2</sup>

○花井美月<sup>1</sup>、池田義明<sup>1</sup>、河田健司<sup>2</sup>、森一博<sup>1</sup>

【目的】名古屋第一赤十字病院(以下、本院)では、がん化学療法に関連する業務としてレジメンに基づく処方鑑査、無菌的混合調製、薬剤管理指導を行うとともに、多職種共同のチーム医療における薬学的患者ケアを実践している。今回、がん化学療法の安全な実施に薬剤師が寄与しているかを評価するために、入院がん化学療法注射せんの疑義照会内容を解析した。

【方法】2011年1月から2011年12月までの1年間における入院がん化学療法注射せんを対象とした。疑義照会内容は、1)投与量、2)支持療法、3)溶解・希釈、4)レジメンの選択、5)併用内服薬、6)投与速度、7)配合変化の7項目に分類し、各項目の件数、処方変更された割合を算出した。

【結果】対象期間内の入院がん化学療法注射せんは、7,699枚で、疑義照会は158枚(2.1%)、162件であった。内訳は、1)投与量101件、2)支持療法23件、3)溶解・希釈19件、4)レジメンの選択15件、5)併用内服薬2件、6)投与速度1件、7)配合変化1件であった。疑義照会を行った162件中、120件(74.1%)が処方変更された。

【考察】治療直前の肝・腎機能検査値や標準体重を考慮した抗がん剤の投与量に関する疑義照会が最も多く、疑義照会後の処方変更率は高かった。また、本院は初回レジメンのがん化学療法患者に対して、腫瘍内科医、がん専門薬剤師、がん化学療法看護認定看護師などによる多職種カンサボードを毎日行い、選択レジメンの妥当性、臨床検査値異常の有無、基礎疾患の有無などを確認している。同一期間内において多職種カンサボードを実施した患者1,032名のうち147件(約14%)が処方変更されている。これらのことから、薬剤師はがん化学療法の安全な実施に寄与していると考えられる。